

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 30 年 6 月 23 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25244031

研究課題名(和文) 中世・近世移行期における守護所・城下町の総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive study of provincial constable headquarters and castle towns in the transition period from the medieval to early modern eras.

研究代表者

仁木 宏 (NIKI, HIROSHI)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90222182

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 32,900,000円

研究成果の概要(和文)：研究集会を合計13回開催した。各集会では、レジメ集冊子を刊行し、現地見学会を催した。毎回、10名前後の報告者に登壇いただき、それぞれの地域の特徴、全国的な視野からする最新の研究発表などがなされた。研究代表者、研究分担者だけでなく、多くの研究者の学問的な相互交流が実現し、比較研究の実をあげることができた。

16世紀から17世紀初頭の城下町には地域ごとの違いが大きかったことが明らかになった。先行する港町・宿、宗教都市のあり方、大名権力の性格、地形、流通・経済の発展度合いなどが城下町の空間構造や社会構造を規定した。いわゆる「豊臣大名マニュアル」の限界性にも注目することが必要である。

研究成果の概要(英文)：We have convened a total of thirteen research meetings. For each meeting we printed the research materials, and conducted field research at specified locations. On each occasion we then heard reports from approximately ten presenters who provided cutting edge research results regarding the special characteristics of each locale and region examined, and who also provided viewpoints from a broader nationwide historical perspective. The research representatives were not just specialists who spoke to their own area, but they also engaged in fruitful exchange from a variety of scholarly backgrounds, and they were able to present fruits of comparative research. It has become clear that there were substantial regional differences in castle towns during the period from the sixteenth century through the beginning of the seventeenth century.

研究分野：日本中世史

キーワード：守護所 城下町 中世史 近世史 都市史

### 1. 研究開始当初の背景

15世紀末から17世紀初頭にかけて、武家の地域支配拠点であった守護所および戦国・織豊期城下町は、史上初めて武家が本格的かつ全国的に都市づくりを行ったもので、近代・現代都市の出発点と位置づけられる。守護所・城下町研究は、1980年代以降、もっとも研究が進んでいる分野の一つで、現在も発掘調査や文献研究によって日々、新しい事例が加えられているが、ともすれば個別化、分散化しがちである。

### 2. 研究の目的

本研究では、(1)全国の守護所および戦国・織豊期城下町の事例を網羅的に析出し、その地域的展開(どこに、どんな城下町があるか)の悉皆調査を第一の目的とする。

(2)発掘調査成果、城郭縄張りの検討、都市法令の分析などを通して、城下町の空間構造・社会構造などを比較検討し、地域的特色、時代による変遷などを解明する。

(3)各地での研究集会・現地見学会の開催によって、城下町の地域的特徴を体感し、研究メンバー(研究代表者・研究分担者・連携研究者・研究協力者)の共通認識を養う。それぞれ固有のフィールドで活動している研究者にとっては、他の地域の城下町の実態を知ること、自らの地域の城下町の特徴を認識する得がたい機会となる。

城下町については、従来は戦国大名や織豊政権による規定性、普遍性が重視されてきたが、本研究では、中世以来のそれぞれの地域社会の個性、先行する港町や宗教都市などの都市群のあり方がどのような形で城下町に刻印されているかを解明する。その上で、改めて統一性、発展段階などについて新たな歴史像を提起する。

本研究ではさらに、経済・流通の展開過程、地域経済圏の成立などが城下町の空間形成にどのように作用したのか、具体的に解明する。織豊政権の「天下統一」、地域統制のあり方と城下町の構造変容を有機的に関連づけて分析してゆく。また、伸長著しい城郭研究と城下町研究を連携する方法論を開発する。これらの研究視角を導入することで、当該期における東アジア海域世界の社会変動の中での城下町の位置づけが可能となるだろう。

本研究では、それぞれの時代・地域の城下町の個性を積極的に解明するが、これは城下町を活用した町づくり運動、文化財保護にとって大きな意義をもつ。市民向け講演会をスケジュールに組み込むことで、城郭だけでなく、城下町にも関心の目を広げることにつとめる。

### 3. 研究の方法

(1)研究集会では、a.これまで、「古典的」研究で取り上げられてきた城下町(土佐国岡豊など)、典型的とみなされてきた城下町(越前

国一乗谷、美濃国岐阜、摂津国大坂など)、b.近年、調査研究が画期的に進められてきた城下町(尾張国小牧、阿波国勝瑞、豊後国府内など)をそれぞれの会の主題に取り上げ、研究成果を報告いただくとともに新しい位置づけを試みる。また、その城下町と関連したり、周辺に立地したりする城下町(群)についての報告、地域における権力編成や経済流通についての報告などを組み合わせる。なお、研究代表者は、原則として各研究集会において講演・報告を行い、研究の意義を訴えるとともに、全国的な研究動向、本研究の進捗状況を広く伝えることにつとめる。

### 4. 研究成果

研究集会を以下のとおり開催した。(1)守護所シンポ2「新・清須会議」のプレシンポ。2013年12月1日、岐阜。(2)守護所シンポジウム2「新・清須会議」2014年8月23~24日、清須市清洲市民センター。(3)徳島研究集会「阿波の守護所・城下町と四国社会」2014年11月22~24日、徳島大学常三島キャンパス。(4)中津研究集会「中世都市の黄昏と近世城下町の曙光」2015年2月21~22日、中津市立小幡記念図書館。(5)福井研究集会「中近世移行期越前国における都市・地域・権力 一乗谷から北庄(福井)へ」2015年6月20~21日、福井市地域交流プラザ。(6)大和研究集会「16・17世紀大和国における都市と権力 城下町・陣屋町の成立と変容」2015年10月31日~11月2日、葛城市歴史博物館。(7)金沢研究集会「中近世移行期前田家領国における城下町と権力 加賀・能登・越中」2016年6月18~19日、金沢歌劇座、石川県文教会館。(8)米子研究集会「中近世移行期の山陰東部における都市・地域・権力 因幡・伯耆・出雲」2016年11月19~20日、米子市福祉保健総合センター「ふれあいの里」。(9)美濃研究集会「中世・近世移行期における美濃の様相~拠点的な場の形成と変容~」2016年12月3~4日、可児市広見東公民館、可児市文化創造センター。(10)北関東研究集会「伝統的武家の城下町」2017年6月3~5日、小山市文化センター。(11)大阪研究集会「豊臣期における大坂と摂河泉」2017年7月1~2日、大阪歴史博物館。(12)総括シンポ。2017年10月14~15日、京都大学。(13)総括シンポ。2017年11月4~5日、大阪市立大学。

各研究集会において、レジメ集冊子を刊行し、多くの場合、現地見学会も催した。清須・葛城などでは多数の市民の参加も得た。それぞれの集会では10名前後の報告者に登壇いただき、それぞれの地域の特徴、全国的な視野からする最新の研究発表などがなされた。研究代表者、研究分担者だけでなく、多くの研究者の学問的な相互交流が実現し、比較研究の実をあげることができた。

次に、総括シンポにおける研究代表者の報告内容の一部を引用するかたちで、本研究

の成果を示す。

#### 戦国期権力論と守護所・城下町

一九八〇年代後半になされた、小島道裕の戦国・織豊期城下町論は、その学際的研究の画期性もあり、城下町研究における記念碑的な存在であることは誰しも認めるところであろう。

小島は、戦国大名の権力を主従制と統治権的な支配権から説明し、それを城下町の中心と周縁という空間の中で説明した。周縁の場には楽市令が出され、そこは網野善彦がいう「無縁」「楽」の性格で説明できるとした。小島説の前提には、当時、通説と考えられていたいくつかの学説が位置する。戦国大名権力は、在地領主制の発展形態であるとする永原慶二の大名領国制論と、主従制と統治権から中世権力を説こうとする佐藤進一説。都市を中心と周縁から考えようとする石井進説。そして網野や勝俣鎮夫の「楽市」論である。

その後の研究史において、中世都市の本質を「楽」で説明することはなくなった。中心と周縁という構造は宗教都市をはじめ多くの集落でも認められるので城下町の「専売特許」ではありえない。美濃加納、近江石寺などの復元研究が進み、城下町中心部を直屬商工業者の居住地と規定することは実証的に不可能となった。何より戦国大名権力論はその後、大きな進化を遂げ、権力の本質を主従制におくことは自明ではなくなっている。

川岡勉は、幕府一守護体制論を提起し、室町時代においては、中部地方から中国・四国地方までの守護が、将軍から国成敗権を譲り受ける形で公権としての支配を実現していたとする。さらに、戦国時代の各地の地域権力も「戦国期守護」として規定すべきであると主張している。川岡は、発給文書の形式、権力意志を決定する奉行人体制などの幕府制度を模倣することで、守護は幕府・将軍の権威を借りることができたという。戦国時代になって将軍の権力が低下した時期には、むしろ守護本来の形式を踏襲することで、独自に国成敗権を発揮しえたと考えている。

一五世紀末以降の守護所空間のあり方は、川岡の議論に適合的である。すなわち、多くの守護所では、方形の守護館を中心に、守護代や一族、家臣の方形館が平地に展開する。守護館を中心とする秩序は、館の大きさや建物の格などで示され、こうした館で遂行されたさまざまな行事によって守護とその家臣たちは自分たちの立ち位置を確認したのであろう。一六世紀第二四半期以降、多くの戦国大名が山城に本拠を移すなど、城下町の構造を変えていったのに、甲斐武田氏、駿河今川氏、周防大内氏などでは、守護所スタイルが維持された。これらの大名が伝統的な守護であり、一六世紀においても守護としての権威を一定程度有効に活用しながら支配を進めていたことにかかわっているものと推定される。

守護所、城下町という、大名の拠点都市の

あり方には、その大名権力の性格が濃厚に反映される。一六世紀第二四半期以降、平地の方形居館を捨て、山城の上に政治・生活の場を設ける戦国大名が増えてゆく。山城の上に拠点をすえることは、単に軍事的な安定性を確保するのみならず、城下町を見る、領国を睥睨するという視角上の効果、物理的な上下関係を家臣や領民に認識させる効果も大きかったと推測される。この他、家臣団集住が進むこと、町場もふくめ惣構で囲繞することが見られることなどが、この時代の城下町の特徴である。その一方で、三好氏の摂津国芥川山城、河内国飯盛山城などのように、山城が、顕著な城下町を伴わない例もある。

#### 武家の拠点形成と主従制・公権

16世紀第2四半期に確立する戦国城下町（戦国期城下町）の成立過程については二つの学説がある。

一つは、かつて建築史学（都市史学）や歴史地理学で唱えられたもので、中世武士の居館を起源と考える。イエ支配権、主従制支配権が強い武家館が中心にあり、周囲に家臣屋敷、領民の住屋が建つ同心円構造がイメージされる。この構造がそのまま大きくなったのが戦国城下町で、家臣たちや直屬商工業者は大名の主従制支配権によって集住させられた。但し、商職人の多くは主従制支配下に入ることを嫌い、「楽」の原理が卓越する）周縁の市場に居住したと考える。

戦国城下町はこうした二元性を特色としたが、織田信長の安土城下町以降、主従制が一層強くなることで城下町の町場全体を「楽」の空間とすることが可能となり、一元的な近世城下町が成立した、とする説である。小島道裕氏が確立した学説で、近世都市史研究者や城郭史研究者の中に支持者が多い。

もう一つは、1990年代以降台頭してきた学説で、守護所の存在を前提として重視する。守護所は、前代の国府・国衙の公的支配権を継承し、しばしば府中・府内とよばれた。守護所には、守護館の他に一族・家臣の館も建っていたが、いずれも平地の方形居館であり、守護館は顕著な卓越性をもたなかった。守護所が戦国城下町に発展する過程で家臣団の集住が進むが、それは大名権力の支配システムの進化にともない、家老・奉行として合議し、行政文書に署判する必要が生じたからであるとする。

この学説には、中近世移行期の権力を、主従制の単純な発達から解くのではなく、「公儀」として説明しようとする研究動向が作用している。また発掘調査や歴史地理学的な研究において、15世紀後葉までの武家館の周囲に家臣屋敷や（直屬）商工業者居住区が認められる事例は少ない。さらに、戦国城下町では多様な性格の町人が町場に混住している例が多く、二元性は地理的にも、論理的にも実態としては認めがたい。

しかし、実際には、14世紀以降、武家は、主従制と公権の両方をからませあいながら

地域支配における求心性を獲得していった。そもそも武家支配の場において、主従制と公権を截然と区分することは不可能であろう。主従制か公権かという「空中戦」ではなく、南北朝・室町時代の武家拠点形成の具体的な場における検証が重要であろう。

14世紀、各国の守護は初期的な守護所(国支配の拠点)を設けていたが、家臣団集住はほとんどみられず、付属する町場は多くの場合、存在しないか、きわめて小さかった。守護以外にも幕府奉公衆などの有力武士は拠点形成を行ったが、これらは一見、荘郷の政所、地頭・在地領主の居館とそれほど違わなかった。発掘調査や歴史地理学的な研究によって、この段階の武家館の存在が認められる事例は少なくない。しかし、ほとんどは居館単体が確認されているだけであり、館主の性格や、地域における居館の機能などについては不明なままである。

室町幕府による全国支配が進む中で、武家による地域支配を担う守護や有力武士の拠点がどのように形成されていったのかを、具体的に明らかにしてゆく必要がある。

武家拠点形成と社会の全体構造の把握

近年盛んな戦国大名(戦国期権力)研究は、権力の性格規定、家臣団編成の論理の解明などを飛躍的に進めてきた。しかし、多くは個別の大名・家臣の研究にとどまり、戦国期武家権力の普遍的・本質的研究は必ずしも深まっていない。また検地、身分編成、商業支配、宗教統制などへの関心が薄れ、支配の全体構造にかかわる研究は進んでいない。それ故、豊臣政権や近世初期につながる道筋も不明確になっている。

武家の拠点形成のプロセスは、武家が支配領域の経済流通を掌握し、城下町を中心地として権力を確立してゆく過程でもあった。15世紀における経済・流通の発展が地域社会の核としての都市(港町、宗教都市など)を発達させると、武家は都市を掌中にするを通じて、それまでできなかったレベルで地域支配を進められるようになる。豊臣政権は、征服地に城下町を造ったり、服属した大名に先進的な城下町を建設させたりすることで、より求心的な中心地を創設し、権力統合を押しすすめた。城下町は「天下統一」のための重要な要素であった。さらに近世においては、各幕藩領主の城下町が卓越した中心性を獲得し、領国を統合する拠点になってゆく。

こうした観点からいえば、15世紀末から17世紀初頭における拠点形成、城下町の発展を研究することは、武家権力の本質、支配の全体構造を見通すことにつながる。また城下町の具体的な形態、機能を比べることで、大名権力の特質を全国的に比較するための座標軸を得ることができる。さらには、戦国期から豊臣期、近世初頭にいたる大名権力や領国の継続的な変遷を追うことができる。もちろん、具体的な拠点形成のあり方から判明するのは武家権力の一面にすぎないが、異なる

地域、異なる時代を越えた比較研究、変容の検証にあたって、城下町研究は有効性をもち、権力研究の新たな方法を生み出す可能性をもっている。

さらに、戦国期から豊臣期にかけての城下町の成立・発展を、武家による拠点形成の視点のみから説明することの限界性も明確になってきた。城下町の立地や機能が、先行する中世都市である港町、宗教都市(「山の寺」=一山寺院、寺内町)に規定されることは事実であり、やがてそれらをどのように包摂して城下町が展開してゆくかを丁寧に検証する必要がある。こうした手法によって、地域社会の中心に武家拠点が位置づいてゆくことの本質的意義がはじめて明らかになる。

つまり14世紀以来、武家拠点が明確化し、都市として発達することで地域社会における中核としての地位を確立する過程は、武家が国家権力として確立し、社会統合の主体となる経過と完全に重なっている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

山村亜希、犬山城下町の空間構造とその形成過程、地域と環境、査読有、14号、2016、1-23

秋山伸隆、戦国時代の道・川・橋、ひろしま県史協、査読無、33号、2015、9-12

中井均、中世城館跡の考古学的研究 -織豊系城郭を理解するために-、織豊城郭、査読無、14、2014、1-9

山村亜希、岐阜城下町の空間構造と材木町、愛知県立大学日本文化学部論集(歴史文化学科編)、査読無、5号、2014、1-28

仁木宏、戦国時代の城下町における「町づくり」、都市文化研究、査読有、16号、2014、56-64

山村亜希、阿波勝瑞 城下町の立地と景観、中世都市研究、査読無、18号、2013、101-115

[学会発表](計8件)

仁木宏、戦国時代南近畿の地域社会と都市、和歌山城郭調査研究会、2018年

本多博之、天下統一とシルバーラッシュ、石見銀山研究会、2016年

仁木宏、16世紀都市論ノート、中世都市

史・流通史懇話会、2015年

仁木宏、中世の府中・府内・守護所、山陰  
中世土器研究会、2014年

仁木宏、16世紀大阪論、大坂城研究会、  
2014年

仁木宏、和泉府中の歴史地理環境と空間復  
元、1617会、2014年

津野倫明、長宗我部権力の展開と浦戸の拠  
点化、1617会、2014年

仁木宏、日本中世固有の都市類型 - 宗教  
都市と城下町 -、「平泉の文化遺産」の拡張  
登録に係る研究集会、2013年  
〔図書〕(計4件)

仁木宏他、思文閣出版、守護所・戦国城下  
町の構造と社会、- 阿波国勝瑞 -、  
2017、368

大澤研一・仁木宏他、和泉書院、秀吉と  
大坂城と城下町、2015、311

仁木宏他、清文堂、中世日本海の流通と港  
町、2015、310

堀新他、柏書房、豊臣政権の正体、2014、  
331

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

仁木 宏 (NIKI, Hiroshi)  
大阪市立大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：90222182

### (2) 研究分担者

中井 均 (NAKAI, Hitoshi)  
滋賀県立大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：10621427

### 研究分担者

山村 亜希 (YAMAMURA, Aki)  
京都大学・大学院人間環境学研究科・准教  
授  
研究者番号：50335212

### 研究分担者

本多 博之 (HONDA, Hiroyuki)  
広島大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：30268669

### 研究分担者

堀 新 (HORI, Shin)  
共立女子大学・文学部・教授  
研究者番号：80296524

### 研究分担者

秋山 伸隆 (AKIYAMA, Nobutaka)  
県立広島大学・人間文化学部・教授  
研究者番号：60142337

### 研究分担者

津野 倫明 (THUNO, Tomoaki)  
高知大学・人文社会・教育科学系・教授  
研究者番号：60335916

### (3) 連携研究者

玉井 哲雄 (TAMAI, Tetsuo)  
国立歴史民俗博物館・名誉教授  
研究者番号：80114297

### 連携研究者

小野 正敏 (ONO, Masatoshi)  
人間文化研究機構・元理事  
研究者番号：00185646

### 連携研究者

坂井 秀弥 (SAKAI, Hideya)  
奈良大学・文学部・教授  
研究者番号：50559317

### 連携研究者

大澤 研一 (OSAWA, Kenichi)  
公益財団法人大阪市博物館協会・大阪歴史  
博物館・学芸員  
研究者番号：40191936